社会福祉法人
名東福祉会
機関誌ワークス

WORKS

Empower&Energize

No100
2005/04

１００号記念 講演録

『やさしい社会、つめたい社会』

2005/2/20　日進市民会館小ホール

講師　渡辺　哲雄　氏

朝、喘息の発作が起こってしまいまして・・・。遅くなってしまいました。ご心配をおかけして申し訳ありません。車で飛ばしてきたのですが、警察がいない事だけを祈っていました。こんなに急いだ事は久しぶりです。

それにしても、喘息って嫌ですね。そういえば、『やさしい社会、つめたい社会』というテーマに関してですが、今朝、喘息の発作が起きてしまったことを、こちらにまず電話で連絡しましたら、「くれぐれも気をつけてお越し下さい。」という言葉をいただきまして。「えっ！遅れるんですか！」なんていうことは一言も聞かなかったんですよ。「大変ですね、大丈夫ですか？」「気をつけて来てくださいよ。」って気遣っていただいけると、すっごく嬉しいですね。で、その後さらに、「10分遅れで進行させますから。（お気をつけて）」とまで言われると、「優しい社会だなー」と思いますね。ちなみに昨日は、名古屋の伏見ライフプラザという所でお話をさせていただいたんですけど、あの時は、主催者が地下の駐車場に入れればいいと言うのでそのつもりで行ったら、駐車場の係の人が出てきて、「許可証は？」とおっしゃる。「いや、今日の講師です。主催者が入れろとおっしゃたんですけど。」と申し上げたら、「許可証ないと入れませんけどねー」って言われて、「許可証はどこで出るんですか？」って聞いたら、「私は知りませんよ。」ですよ。「冷たい社会だなー」と思いましたね（笑）。今私は、簡単に「冷たい」とか「温かい」とか「優しい」とか使ってますけど、実は、「冷たい」とか「優しい」とかって言う話は、ものすごく難しい話ですよ。

今、ご紹介にあったように、私は岐阜県ソーシャルワーカー協会という、人様の相談にのる係の人たちの集まりの会長を12年務めています。年齢的に推されただけですけれども。その関係で集まるときに、仲間がよく飲むんですよ。やっぱり、コミュニケーションというのは、ノミニケーションって言われますもんね（笑）。飲んで親しくならないと、なかなか本音の話が出来ないのが日本の文化です。特にこういう専門家と言われる人たちというのは、集まると、寄ると触ると、専門用語を使って武装するんです。自分はよく物

を知っているんだぞという風に。そして、言われた人間はそれに負けまいとして武装しますし、言った人間も、さらにもっとすごい事を言おうとして武装する。一方で、相手の方がいつもいつも立派に見えたりして、周りの人の方が、おれはダメだ、おれはダメだと思ってしまうこともある。そして劣等感を抱いて帰って来るというのが、今までの専門集団のあり方だったんですよ。私はこういうキャラクターですので、専門家振って言う事が出来ません。ですから、そんな用語使わずに、「お前、その言葉の意味知ってんのかよ？」みたいに言うと、「実は判らないの。」という具合に、本音で話ができるようになる。キャラクターということで言えば、今日なんか慌てて飛んできたもんですから、髪の毛はお風呂でお湯をざーっとかけて、乾かしただけで（笑）、滅茶苦茶なんですよ。こんな事は生まれて初めてという位、急いで急いで、背広を持って、ベストを持って、車に乗って、そして、一宮インターのあたりで、ネクタイがないことに気付いて。会場へ来て、主催者の方に「ネクタイ借りれませんか？ネクタイ借りれませんか？」って聞いて回りまして。そして、この全くあつらえように、同じ色のネクタイをお借りできて（笑）。「優しい社会だなー」と思います。

飲み会の話でしたけど、以前、私が日曜日の夕暮れ時に家にいました。ずーっと雨が降っていました。バケツをひっくり返したかのようなものすごい雨なんですよ。そこへ電話がかかってきましてね。で私が受けたら、その協会の仲間が「おいっ」て・・・仲間ですから会長でも「おいっ」て言うんですよ。「おー、今、柳ヶ瀬で飲んでいるんだけど、出てこんか」って言うんですよ。柳ヶ瀬って言ったって、ざーっと雨が降っています。車で行くと、飲んだら帰れませんが、でも行きたいんですよ。飲むの好きでしてね。で、かみさんが、台所におるんですね。こんなとき、受話器をふさいで、「悪いけど柳け瀬まで送って行ってくれないか？」って言うと、「何考えてんのっ！」て言われちゃうんです（笑）。私、長い結婚生活でちゃーんと学習してましてね、わざと受話器をふさがないんです。受話器を空けてね、相手にも聞こえるように、「ねー、仲間が今柳ヶ瀬で飲んでいて、来いって言うんだけど送っていってくれない？」と聞くんです。そうやって、かみさんに「あら、相手に聞こえてるわ」と思わせるんですね（笑）。すると、かみさんは「何考えてんのって！」言うと、「お前のかみさん、どういう奴だ？」って言われるのが分かるもんですから、「もうしょうがないわねー」とか言って（笑）、雨の中を、軽自動車のワイパー一番速く動かしながら、無事、柳ヶ瀬まで送ってもらうという作戦をとります。

それで着いて、スナックを探して行くと、もうみんな結構飲んでて、中に「久しぶりっ」て声をかけてくる奴なんかがいる。そのときは本当に久しぶりの奴が一人いました。背が高くてね、格好良いんですよ。スポーツ刈りで、山登りが趣味で、これが何年ぶりかに出会ったんですね。「元気かよ」って聞いたら、「元気です」って。「相変わらずですよ」「相変わらずって、幾つになった？」「３０」だって言うんですね。まだ、一人なんですよ。「一人か、まだ。お前みたいな格好いい奴が一人かよ。俺みたいなのが結婚してるんだぞ。」なんて思うんですけど。すると「渡辺さん、誰か良い人いません

か？なかなか、これはっていう人がいなくて。」って言うんですね。私その時、ビビーと頭に浮かんだんですよ。当時私、病院に勤めていたんです、大きな病院に。病院ってね、女の人が佃煮にするぐらいヴァーッとおるんですよ（笑）。その中で、あっ、あの人だって頭に浮かんだ女の子が一人いたんです。親睦会で「飲み会しようよ」って誘ったときに、断る女の子が一人いまして、事務の子なんですが、「何で断るのよ？行こうよ？」って言うとね、「お父さんが病気だ」って言うんですよ。「お父さんが病気だからって、お母さんがいるじゃないか。」って言ったら、「看病はお母さんがするんだけど、身内に一人病んでる人がいるのに、自分だけそんな酒飲んで浮かれる気分になれない。」って。そんなこと言うような人が今、若い人の中にいますか？母危篤でも飲んでたりなんかする人がいる世の中ですよ。これは良い子だ！と思いながら、その子が２７、８歳になってもまだ、良縁に恵まれない状態で、そそとして生きとるわけですよ。「これだー」って思ってね、私、「分かった。俺、良い人知っているから紹介するよ。」って言って、そして病院に戻ってその彼女に、「ねーねー」って、「背の高いすごい格好良い人いたよ。人柄は保障するけど会ってみない？」って言ったら、「渡辺さんが薦めるなら、会ってもいい。」って言うんですよ。で僕、間に入ってレストランかなんかで食事させながら真ん中にいて、「どう？どう？」なんて事やるのは嫌ですから、卓球の試合じゃないんですから（笑）、だから場所だけ決めてね、お互いに週刊誌を小脇に抱えて立てと言ったんですよ。もう今、皆さんの頭の中には、そこに大勢週刊誌を抱えて立っている他の人がいるという風に思っているんでしょ？そんな事はあり得ないんですよ。ちゃんと二人は、「この人だな」「この人だな」ってお互い分かるものなんです。で、一度会ったんですよ。「どうだった？」て聞くと、「とっても良い人で」って言って、「今度また会う約束しましたわ。」私はしばらく、そのまま知らん顔してたんですけど、なんか風の便りに付き合っているらしいという噂が流れてきましてね。付き合ってんのかと思ってたら、私に結婚式のスピーチをして欲しいという。この話の中で私は、縁遠かった二人をくっ付けてしまうという優しい立場に立った訳ですよ。

　それで、結婚式が済んで、しばらくしてからですね、今度は協会全体の飲み会が下呂温泉であったんですよ。私は会長ですから、一番ひな壇に座らされるんですね。嫌なんですけど。で、座っていると皆が次々と注ぎに来るんですよ。「そう、頑張ってね」「良かったね」「おうっ！」とかってやっているうちに、女の子が一人来て、その子が私に酒注いでくれたんですね。そして、ちょっと熱っぽい目で私をちらっとこう見ましてね、それで、「会長さん今夜、部屋に尋ねていっていいですか？」って言うんですよ。私、妻も子供もあるんですから（笑）。だけどね、こういう人の相談に乗る係っていうのは、これ職業病ですかね？とにかく相手の言うことをとりあえず、受け入れるんです。「いいよ」って言ってしまいましてね。言ってしまってから妙に胸騒で、早く部屋に入って風呂入って待ったりなんかりして。何で風呂に入るのかよく分からんですけど（笑）、「来るんだ、来るんだ」と思いながら待っていたんですよ。そうしたら、夜中にトントンと来たんですね。私も「開いてるから」なんて言って。すると彼女が

ですよ、部屋に入るなり私の胸に顔を埋めてわーっと泣くんです。こういうときは、自分の手をどうするかが難しいですよ。抱きしめるようになったら変でしょ(笑)。かといって、両手を挙げると、銃突きつけられたみたいでしょう（笑）。だけど、やっぱり手を相手の背中に回したりしたら最後みたいな感じがするんですよね、温泉のホテルで。こうしたらとか、ああしたらとか、どうしたらいいか分からない状態でいたら、彼女が泣きながらね、「渡辺さんどうしてあんなことしたんですか？」って言うんです。「あんなこっとって何？ちょっと落ち着けよ。」「ここへ座れよ」と言って、これは全然別の路線が始まったなという風に思いながら、ソファーに座らせて、「どうしたの」って聞いたら、彼女がね、付き合っている男の人がいたんですよ。これがね、山登りが好きでね、背が高くてね、ハンサムなんですよ(笑)。きっと、二人でたびたび山へ登って、山なんかトイレ在りませんから、親しくなると「トイレ大丈夫？」「え、ちょっと」なんて言って、「じゃー俺が見張っていてやるから」なんて、彼女が岩の陰で用を足すのを彼が見張っているくらい心を許し合っている訳ですから。当然、お互いに好意を抱いている。だけど女の方から気持ちを打ち明けるのは、まあちょっと、はしたないと思うのかもしれない。じーっとプロポーズを待っていたら、だんだんだんだん疎遠になっていったって言うんですよ。電話かけても、ちょっと煮え切らない。ひょっとすると、留守だったり。で、山登りもピターッと途絶えて、どうしたんだろうと思ったら手紙が着て、「今度結婚する事になった。君もいい友人として披露宴に参加してくれないか。」とある。そしてその末尾に、「渡辺さんから紹介された人と、今度晴れて一緒になることになった。とっても良い人なんだよ。」と書いてあった、って言うんですよ（笑）。「どうしてそんな人を紹介したんですか？」と言って泣かれた時に、私ね、冷たい事したんだな、と思う訳ですよ。いいつもりでした事が、ちっとも、いいことじゃなかったという事はいくらでもあるわけですよね。一筋縄じゃいかんなーと思います。

私は母子家庭で育ちました。私には父親がいないんですよ。あっ、キリストのようですね（笑）。母親と父親が、私が2歳の時に別れてしまったもんですから、父親の顔は知らずに育ったんですよ。で、もう、いろんな事が吹っ切れて、こんな年になって母親に、「親父ってどんな顔してたの？」って聞くと「お前、鏡見てみ？」って言われますから（笑）、まあ、同じ顔してるんだな、と思います。あるところにゲンスケっていうじいちゃんとフサというばあちゃんがいまして、この二人が年取ってから女の子が一人生まれたんですよね。これに婿をとりまして、21歳の時にとってもかわいい男の子が生まれたんですよ。これが哲雄って言うんですけどね（笑）。2歳で父親と別れてしまったんですね。実家はゲンスケさんが始めた印刷屋で、自営業なんですよ。自営業はね、もう病気したら終わりだと言いながら暮らしてましたね。「病気したら終わりやぞー。」と。でも人間は病気をします。私も喘息ですしね。病気すると自営業は金が入って来なくって、金が出て行くんですよ。だから、節約して節約して暮すんだぞっていうんで、真っ黒になって働いた後、夜は内職してました。

日曜日になると畑に行くんです。

野菜は自分の畑で作っていて、よーく畑に連れて行かれました。今でも、こんな小ちゃい頃に畑に連れて行かれる時の夢を見て、夜中に目が覚めますよ。寝汗かいてます。案外恐ろしい夢なんです。というのは、リヤカーにですね、フサがこうしてリヤカーを・・・ところで、リヤカーって押すんですか？引くんですか？これが、今でも謎なんですよ（笑）。リヤカーを押すのか引くのか。で、母親のトシコは、そのリヤカーの後ろを押して行くんですけど、私はリヤカーに乗せられるんですよ。小さい私がね。ところが、乗って行くリヤカーの私の背中には、木の桶が二つありましてね（笑）。これに有機肥料が入っている訳ですよ。当時、まだ舗装されていない道ですよ。輪っかが窪みにはまったりすると、背中でチャプッて音がしたりするんですね。そういう夢を見ては未だにドキッとして目が覚めて、寝汗をかいているという状態ですね。畑に着くと、私は小屋の前に放置されるんですよ。母親とばあちゃんは一生懸命、二人で耕すんですよ。耕していると、冬眠していたミミズが出てくるんですね。そうすると、私が暇で暇でしょうがなくて、退屈しているだろうからというんで、母親がね、「哲雄、哲雄、ミミズやぞー」って投げてくれるのが（笑）、ボチョット落ちてくる。これが私のおもちゃでしてね。で、あまり切れなくなった鎌というのが子供用にありまして、これでミミズを半分に切るんですよ。すると、ちょっとした汁がジョロッと出て、まだ両方動いてるんですね。あれ、動いていると気持ち悪るいからっていうんで、また半分に切ると、四つにしても動いてるんですよ。これが動かなくなるまで切りました。切りながら、私は何を考えているのかというと、「あらー、不思議だな。命ってどんなもんなんだろう。僕も半分に切っても生きてるんだろうか？」みたいな事なんですね。今でも憶えてます。それで動かなくなるとね、今度は俺が殺したということが、ちょっとした罪悪感になって残ってるんですよ。今でもそんな事を思い出すという事は、結構魂の深いところでこんなことして生き物を殺したという、その罪悪感が残ってるんですね。で、他のことに興味を移してふっと戻ってくると、アリがいっぱいたかってましてね、真っ黒に。そのアリが行列を作っている先を追いかけていくと、柿の木があるんですよ。その柿の木の根元にずーっと入って行くのを見て、ここに巣があるのかといって、棒を持ってきてガァーとかき回して、これも今思うと残酷な事したなというね、ここに罪悪感がある。あれ、大事な事だなーって思うんですね、私今。こんな小っちゃいうちから、「命は大事にしろ。命は大事にしろ。」なんて言って、虫一つ殺せない、殺さない。そんな事をするよりも、子どもってのは、殺して埋めて、お墓ごっこなんてして、優しいのか、冷たいのか判らないようなことして。「もう1つ採ってくる」とか言って、ベェーッて殺して埋めて・・・でもあんな事をして、子供の頃に、ほんの僅かな命をちょっと犠牲にして、そして、生きる事、死ぬ事、自分もその一部なんだ、命というものの一部なんだっていうことを体で体験するっていうことが大事なんだって思うんですが。「あっ、かわいそうだから、逃がしましょうね。かわいそうだから逃がしましょうね。」って言ってるのは、私はあんまりいいことじゃないなと、個人的には思うんですよ。私の体験からいくと、畑でのあの出来事がとても大切でした。

そんなことして遊んでてて帰ろう

と思ったら、南天の木の根元に卵が3つ落ちていたんですよ。「母ちゃん卵だよー」って言ったら、母親が来て、「ほらほら、どんな卵やろう」「何が孵るんやろうね」なんて言って、私の手の上に3つ載せて、私をリヤカーに乗っけて、また帰る訳です。帰りは有機肥料はありませんから安心して帰れるんですよ（笑）。家へ帰ったら、印刷屋ですからダンボールの箱が一杯あるんです。そこで、母親が手頃な箱を用意して、中に綿を敷き詰めて、そこへ私が持って来た卵を3つこう置いて、上に丸い穴切って、そこから裸電球入れて、ポーっと電気付けると暖まるんですよね。で、母と子がそれを眺めながら、母親が私に、「どんな雛が孵るかね？」「どんな鳥なんやろうね」「生まれてすぐに飼うとなつくぞー」「口笛練習しとけよ」なんてね。「ピューって言うとパタパタパタって止まるぞ」「名前付けないかんぞ、名前を」とか言いながら、3羽の鳥の名前を考え、毎日、毎日覗いてるんですけど、一向に孵らんのです。母親が内職をしている傍らで、もう気になっていつもいつも見に行くんですよね。トイレに行く度に見る、覗く。そして4日目、私叫びました。「母ちゃん！母ちゃん！卵がシワシワだよっ！」。母親も「何ー！」て飛んできたんですが、卵が全部、こうシワがよっているんですよ。「何、どうしたんやろうね？」と言って、母親がその卵をこうして裂いたら、中から今にも生まれるばかりのトカゲが出てきましたよ、トカゲが！トカゲが3つ死んでいるんです。つまり、あのトカゲという、ああいう爬虫類は、暖めちゃあかんのですよ（笑）。あれは、冷んやりした冷たいところで、だから、わざわざ南天の根元の影の所に生んであったのを、私たち綿を敷きつめて、電気つけて・・・その結果、トカゲが3つとも、こうして、もう生まれるばっかりの格好で死んでいるのを見て、私の母親がね、言うんです卵見たまま。「知らなんだんやもんな、知らなんだんや。私ら優しいつもりで暖めたんやぞ。哲雄、知らんて事は恐ろしいぞ、知らんて事はなあ、本当に恐ろしいぞ。私たち優しいつもりで暖めたんやもんな。その後、熱かったんやろうな、熱かったんやろうな。」って。ふっと見ると母親が泣いとるんですよ。私ね、あの時ね、21のときの子ですから、この私が小学校上がる前ですからね。例えば6歳と考えても、母親が27ぐらいの話ですよね。そんな時に、「知らんて事は恐ろしいな」「熱かったやろうな」と言って涙を流せる母親に育てられた事を私は感謝しています。これが福祉の仕事をする原点ですね。知らないって事は本当に恐ろしいんです。人間って独りよがりですから、良かれと思って女の子を紹介すると、別の人がふられている訳ですよね（笑）。そんな事がね、私の福祉の原点なんですよ。

独りよがりですよ。学生がワンルームマンションみたいなのを借りて、今うちの息子もちょうど東京に行ってまして、月々の仕送りが大変なんですよ。で、学生の方もね、その家賃払うのがバカバカしいと思うようになると、親しくなった二人が一緒に住むんですって。半額で済みますから。それで親には、「一人で住んでるぞー」と言っている訳ですよね。自分は残ったお金でいろんな事している訳でしょうけど。こんな話聞きましたよ。人間がいかに自分の環境でしか物が考えられないかをよく現している話です。ワンルームマンションの、あのお風呂って嫌で

しょう、トイレとお風呂とが一緒になってますよね。あれは何故一緒になってるか知っています？あれはね、欧米では汗というのは尿なんですよ。だから、汗をかくのは排泄行為なんですよ。シャワーでザーっと汚い物を流し落とすから、トイレも風呂も一緒なんですよ。だけど日本では、くつろぐ場所でしょ。だから、一緒にあるのは嫌なんですね。狭い日本であんなワンルームマンション造ろうと思うと、どうしても一つにしてしまうんですね。それで、学生が二人で住むと、一人がトイレに入っていると、もう一人が風呂に入れないんですよ。一緒に仲良くという場所じゃないですからね。で、スリッパを前に置いておくと、あっ、誰か入ってるな、と分かるようにルールが自然に出来上がったある日、一人がトイレを我慢してて急いで扉をバタンて開けたら、スリッパがなかったそうです。誰もいないと思ったら、一人がシャワーを使ってたんですよ。で、ベージュ色のこんなカーテンあるでしょ、あの向こう側に、こういう棒にタワシみたいなやつが付いた、あれで背中をこうやってこすっているシルエットが浮かんでるんですよ。それ見て、トイレに入った彼がね、「お前」って言ったまま言葉が出なかったんだそうですよ。何故かって、彼はそれでトイレ洗ってたんですからね、（笑）ずーっと。これ、可笑しいでしょ、すごく可笑しいでしょ。つまり、一人の学生の家にはトイレにあのタワシがあって、自分もこうして掃除をするのを手伝わされていたんですよ。だから、これはトイレを洗うものだという先入観があるんですね。もう一人の彼の方には、それはお母さんがやってて、ぜんぜんそんなブラシなんかは頭になかった訳なんですよね。家にはその代わりにお風呂にブラシがあって、それでこうやって、背中を洗っているような家だったんですよ。だから、二人とも全く自分の生活スタイルを変えないで生きていると、一方は背中洗ったので、一方はトイレ洗ってた訳ですよ。ちなみに、そのトイレを洗っている側は、卒業するまで、その事実を彼に伝えなかったという話なんですけど（笑）。伝えれないですよね、これは。独りよがりなんですよ、人間というのは。

こういう所があるんですよ。信号のある交差点でしてね、二車線で、その先に電車が走ってるんですよ。ここが駅でしてね、今渡（いまわたり）という名鉄の駅なんですよ。私が多治見の方から美濃の方に帰るときに、この交差点の手前が渋滞するんです。踏み切りは開いてるんですよ。信号も青なんですよ。なのに進まんのです。何で進まんのかと思って、私がチラッチラッて窓から顔出して見ると、何台か前の人がね、優しいんですよ。脇から入りたがっている車を入れてあげてるんです。どうぞ、どうぞって。この人優しいですよね。優しいでしょう、余裕があって。だけどこれ、母危篤、父危篤、えーウンコが出そう・・・（笑）色んな事情がある人を後ろに待たせっきりでね。あっ、どうぞ、あっ、どうぞってやってるんですよ。イライラッとしますよ。どうせ優しいのなら徹底的に入れてやればいいのに、信号が黄色になると、自分だけスッと交差点を渡って行くんです（笑）。そうすると、ようやくズルズルズルと、後続車が前に詰めて行って、私がやっと交差点を渡ろうというところへ来たときに、嫌な予感がするんですよ。すると案の定、チンチンチンチンッて踏み切りの遮断機

が閉まるんですね。急いでるんですから、ウーって思っていると、これがまた優しい社会か、冷たい社会か、事故を防ぐという意味じゃ、とても優しい仕組みになっていまして、まだ列車の陰も形も見えないのに、降りて来るんですよ（笑）、チンチンチンチンッてね。降りてきても、ぜんぜん列車なんか来ないんですよ。じーっと待っていると、やっと一両がね、運転手だけ乗せて、ガタガタン、ガタガタン、ガタガタンッと走って行くんですね。で、電車が行けばですよ、行けばすぐに遮断機を開けなきゃいかんですよ、こちらは忙しいんですから。電子レンジの時代ですから。なのにね、行ってしまったのに、いつまでも、チンチンチンチンッていうでしょ。その間、じっと待ちながら胃袋に血が出てくるのが分かるような気がしますよね（笑）。ようやく踏み切りが開いて、あっと思っていると、今度はこの交差点が赤になるんです（笑）。こんな時、この人は優しいか、冷たいかの話なんですよね。優しい冷たいって難しいということを象徴する話です。

えーと、お父さんがいました。お母さんいました。そして男の子が小学校3年生、トオル君です。女の子が小学校1年生、カオルちゃんです。〈過労〉じゃないですよ（笑）、カオルちゃんです。こういう4人家族があったんです。それで、お父さんは保険が嫌いなんです。「生命保険なんか、こんなものに入って、俺の命を金で購うのか。」と、「そんなもんに入ったとたんに、不幸な事がおきる予感がする。」みたいな事を言って、入らないんです。掛金がもったいないんでしょうけど。入らずにいたら交通事故で、自損事故で死んだんです。何にも保障がないんですよ、自損事故で生命保険にも入ってないと。何の保障もなく、死んだ途端に母子家庭ですよ。このお母さんは、すぐに働きに行きました。近くの工場へ、真っ黒なって働いて来ても、それまでの豊かな生活は突然貧しくなるんですよね。それで、クリスマスが近づいて来ました。トオル君とカオルちゃんは、駅前のケーキ屋さんのショーウィンドウを眺めるんですよ。「僕は、あの、一番上のチョコレートののったケーキがいいなあ」なんてトオルちゃんが言うと、ポッとガラスが曇る訳です。と今度はカオルちゃんが、曇ったところをキュッキュッて拭いて、「私はあの、白いウエハースの家とあのサンタクロースのろうそくのついた、あれがいいな」って言うと、またポッと曇るんですよ。でまた、キュッキュッて拭いて。二人ともそうやって楽しみに、楽しみにしてるんですけど、実際は立派なケーキが来ないことも知っているんです。お父さんが死んでからというもの、小さなケーキしか食べられないんですよ。節約するしかしょうがないんですから。でもね、クリスマスのイブの当日は、学校から帰って来ると、いつもなら、履物がペッペーッとね、右左散らかして、ランドセルなんか放り投げてあるのに、その日は、壁の釘にランドセルをちゃんと掛けて、靴はちゃんと揃えたりなんかりして（笑）、そして宿題は済ませて、待っているんですよ。そこへ、お母さんが中古で買った自転車をギコキコ鳴らしながら帰ってきて、去年と同じように「おい、クリスマスだよ、おめでとう。」とか言って。「ケーキも買って来たよ。」って、そのケーキが小さいんですけど、それでも、幸せなんです。「ケーキだ！ケーキだ！」と喜んで、それを4つに切るんですよ。1つは、死んだお父さんにお供えす

るんです。だけどそのお供えしたケーキは、やがてもう半分に切られて、また自分たちの所に返って来る事を子どもたちは知ってるんですけど（笑）。で、こうして手を合わせたりなんかしている。お母さんは台所へ立っている。ご飯ができるまで、トオル君とカオルちゃんは、きよしこの夜かなんか歌いながら、待ってるんです。幸せな幸せな、ささやかなクリスマスイブの夜の光景ですけど、「トントン」と玄関の戸が叩かれるんです。そうすると、おしゃまなカオルちゃんが、お母さんの口真似をして、「誰です、今時分」なんか言って（笑）玄関へ出ていくと、町内会長さんがヌッと立っていましてね。「駅前のケーキ屋さんから、恵まれない母子家庭にケーキの寄付がありまして。これ、どうぞ皆さんで召し上がって下さい。」と聞いて、カオルちゃんは喜んで開けたんですよ。すると、きれいな白いデコレーションケーキなんです、あのウエハースの家のついた。カオルちゃんは思わず、「わー、お兄ちゃん！お兄ちゃん！私の欲しかった、あのケーキだよ！お母さんのケーキより、うんと立派だよ！」って嬉しくて叫びます。するとトオル君がやって来てね、「お母さんのケーキが、かわいそうじゃないか！」って、その大きなケーキをバンッと土間に叩きつけたんですよ。当然、カオルちゃんは火がついたように泣き出すんです。町内会長さんも、ビックリして立っているだけなんです。そこへ、台所からお母さんがやって来て、「何をするんだ、この子は！」ってバチーンとトオル君を叩くんです。トオル君は叩かれて、ビックリして立ちすくんでいると、そのトオル君を今度は、お母さんは抱きしめるんですよ。抱きしめられたトオル君の首筋に、熱いものがパラパラパラパラ落ちてくるんですね。お母さんは叩いて抱きしめて、泣いとるんですよ。でも、何で叩いて、抱きしめて、泣いたのか、トオル君は分からなかったんですよ。で、そのトオルちゃんが書いた作文を私は読んだんです。

「クリスマスケーキなんか大嫌いだ」ってトオル君は書いているんですが、本当は誰が悪いのかって事をね、私、こんな仕事するようになってから考えるんですよ。ケーキくださった人は優しいでしょ。多分売れ残りでしょうけど、それでも次の日にちょっと値段下げれば売れるんですから。腐っている訳じゃないんですから。それを、恵まれない母子家庭に寄付をしてくれたんですよ。自分の家でもクリスマスイブなのに、届けてくれた町内会長さんも、私はご苦労様だと思いますよね。カオルちゃんは好きですよ、僕。あの無邪気さ、小学校1年生で、持って回った考え方ができなくて、「私の欲しかったケーキだよー」と無邪気に喜べる。その姿が好きですね。トオルちゃんて、すごいですね。この子は、お母さんのケーキがかわいそうだと、そういう感性をもう小学校3年生で持っているんです。母親は、恐らく町内会長さんの手前、何ていう事をするんだと言って叩く。叩いたけれども、この子が、もうそんな風に育ってくれた事が愛しくて、抱きしめるんでしょうね。父親がいないのに、いい子に育ってるなー、って。だけど一方で、お父さんさえ生きていれば、こんな惨めな思いはさせないのにと思うと、もうなんだか、切ない涙がポロポロポロポロとこぼれてきたんじゃないでしょうか。どうしたら、この悲劇が起きなかったのかという事を考えてみると・・・皆さんもご自分で考えてみて下さい。どうしたらいいと思いますか？どうしたらケーキも生き、ケーキ屋

さんの善意も生き、この家は本当に幸せなクリスマスイブが過ごせたかって考えると、ケーキ屋さんがね、「ケーキを寄付する用意がありますので、もし、ご入用なら申し出て下さい」という風にお母さんに連絡をとれば、「よし、今年は大きいのを持って帰ってやろう」と思って、「お母さん、今年一生懸命働いたからね、ちょっとボーナスたくさん出たのよ。今年だけよ。」なんて言って、渡す事が出来たかもしれない。反対に、「世の中は良い人がいるね。寄付してくれたんだよ、ケーキ屋さんが。」と言って、「来年も貰えるといいね」なんて言いながら、渡す事もできたかもしれないでしょう。これをね、「恵まれない母子家庭に」と言って、自分の善意をちらっと見せつけながら押し付けると、こんな事が起きるんですね。この人がこの人らしく、この家族がこの家族らしく生きていくための選択権は、この人たちになきゃあかんのですね。外からいきなり押し付けられたのではいけないと思います。

私は老人分野がむしろ専門で、『老いの風景』ですから、高齢者のことが長年のテーマだったんですが、こんな話があるんですよ。下（しも）の村と上（かみ）の村がここにあります。老人の係になったときに、生活保護を受けてる一人暮らしのお年寄りの所へ訪問に行くんですよ。で、ここにね、キンさんていう人がいるんです。キンさん８０歳です。ギンさんという女性はいません（笑）。イエモンさんっていう一人暮らしのおじいさんもいました。お茶ではありませんが（笑）。この私が初めて、その事務所の老人の係になったときに、前の担当者から手に渡された、引き継がれた仕事は、特にこのキンさんのこと。この人を老人ホームに入れましょうということです。そういう方針が立っているんですよ。で、「分かりました。」と言って、私パンフレットを持って、尋ねて行くんです。「今度新しく担当になった渡辺です。よろしくお願いします。ところで、老人ホームってご存知ですか？養護老人ホーム。一人暮らしの心配がないように、お風呂もちゃんとあるし、何かあったら、お医者さんにもかかれるし、そして、お楽しみ会だの、何だのがあって、なかなかいい所なんですよ。パンフレット見ますか？」って説明するんですけど、キンさんはしっかりした人なんですよ。何せ、髪は黒々、歯は真っ白ですよ（笑）。しかも朝日新聞読んでいるんですから。（『老いの風景』を連載している）中日新聞じゃなきゃダメですよね（笑）、朝日新聞読んでるんですよ。これがね、私がパンフレット見せてもね、「わしゃ、そんなものエエで」って横向くんですよ。「そんな事言わないで見て下さいよ。病気になっても、心細い思いをしなくて済みますよ。また来月来ますから。」と言って、私は次の所へ移るんですね。いくつかこういう所があるんですよ。ただ、中でもキンさんが私の思い出なんです。で、次の月にまた行って、「ねー、考えてくれましたか？おばあさん、渡辺です。このパンフレットだけでも見て下さいよ。」って声をかけると、「そんなものは、今まで何度も見とるっちゅうの。もう、担当が変わるたんびに、それ持って来てみせる。あんたも同じ事言うんやね。」って言ってね。で、「ちょっと待っとれよ。」と言って、押入れを引き出して、ゴソゴソゴソゴソして、奥の方にあった茶色に変色した書類を私の前にツーッと出して、フンッて知らん顔しとるんですよ。髪は黒々、歯は真っ白ですよ。この書類を見るとね、自

分が死んだら、遺体は大学病院に寄付するという契約書なんですよ。で、横向いたまんま、「わし、ここでのたれ死にしても構わんで。」って言うんです。ちょっと感動しましたね。私、多分かみさんが先に死ぬでしょう（笑）。そうすると、一人暮らしになるでしょう。一人暮らしになって、のたれ死にして、後は医学に役立てるという様な潔さで、一人で生活し続ける覚悟はないですよ。それを、この目の前の小さなおばあさんが、もう契約書まで自分の手元に置いて、毎日を淡々と生きているんですよ。私ね、その覚悟を目の当たりにして、生半可な人間が、何の覚悟もない若僧が出向いて行って、「老人ホーム入んなさいよ。老人ホームは安心ですよ。」なんて言ったって、心が動く訳がないとつくづく思いました。それにもう８０です。出口見えてますから（笑）。その出口見えた人間が、心に深く決めた事は尊重すべきですよ。私、そう思いました。だから、事務所に戻って方針を変えました。「もう老人ホームなし！在宅で！できるだけ在宅で、みんなで見守りながら、安心できるような生活を保障してあげましょう。」という風に変えて、頻繁に訪問するようになったんです。

ところがね、そういう風に方針を変えると、私の方が気負いがなくなります。目的が特になくなりますから、老人ホームの話しないで、世間話してくるんですね。「どう、キンさん、元気？」「あんた、この頃老人ホームの話せんね。」「ええ、もう、あの覚悟知ったら、キンさんはここでずーっと長生きしてよ。」なんていう具合です。キンさんも打ち解けて、ニコッと笑うと歯が真っ白ですよ、これが（笑）。「どっから来たんよ、渡辺さんは？」って言うから、「あー、私、郡上八幡です。」って言ったら、「郡上八幡かね。郡上八幡のどこ？」「瓦町の印刷屋ですよ。」「渡辺って、ほじゃ、フサの孫かね？」知ってるんですよ、これが。「私、郡上八幡におったことがあるんや。」「あっ、そうですか。」「フサの孫がなー。短い間やったけど、おった。」と言うんです、郡上八幡に。そうすると、自分の孫のような気になるんですね。それで「渡辺さん」って言って、本当に心を開いてくれたある日ですね、私が風邪をひいて訪問したんです。森進一状態なんですよ（笑）。「キンさん、元気ですか？」「どうしたの、その声は。」って聞くから、「ちょっと風邪ひきましてねー」って言ったら、「待っとって、待っとって。」って言って、押入れ開けてね、中でゴソゴソゴソゴソやってる。そのお尻だけが見えるんです、こう、ゴソゴソゴソゴソって。嫌ーな予感がするんですけど（笑）、瓶がね、出てくるんですよ。その瓶の上に新聞紙が付いていて、ビニール紐で大事に縛ってある。ホコリがいっぱい溜まっているんですよ。これを出してね、中見るとね、ドロドロみたいな物の中に訳の分からん物が浮いとるんです。嫌ーな予感がするんですよ（笑）。そしたらキンさんが言うには、花梨という物がのどにいいと。これを、はちみつだか焼酎だかにつけた、いつの物なのか、古きゃ古いほどいいんだって言うんですよ。で、ふーっと吹くと、ポーっとホコリがたつのを湯呑みで・・・湯呑みって言ったってね、これが模様かと思うくらい茶渋がついとるんです（笑）。ここへ、あのおたまでね、おたまって言ったってね、ベコベコですよ。ドボドボドボドボってこう入れて、真っ白な歯見せて、「これで治るから」って。私、これ勇気がいりますよ（笑）、勇気が。めちゃくちゃ勇気いりますよ。だけど、先輩から言われたんで

す。「出されたら飲め。そうしないと、絶対に信頼関係が築けん。出されたら飲むんだぞ！汚い茶碗でも。俺だって飲んで、病気になってないから大丈夫だ。」ってこう言われて（笑）。それを思い出すもんですから飲もうと思って。あれ、飲むコツがあるんですね。鼻で息してはいけないんです。口で、口でもう一気にゴワーッて飲んで。あれから、ずいぶん体の調子が悪かったような気がするんですけど（笑）、飲みましたね。それでキンさん、それから本当に心開いてくれたんです。

とある日、イエモンさんの事で電話が入ったんですよ、役場から。上の村の人が死んで、3、4日経って発見されたんです。全然雨戸が開かないし、新聞は溜まっていくし、旅行に行ったような話は聞いてないし、おかしいな、おかしいなって言いながら、4日ぐらい経って、これはやっぱおかしいんじゃないかと言って開けようということになって。雨戸をガラガラッと開けたら、座敷からイエモンさんの遺体が発見されたんです。当時まだ、座敷には囲炉裏が切ってあるんですよ。朝ご飯の仕度で降りようとして倒れたみたいで、背の高いイエモンさんが、ガーッとその囲炉裏にのめり込んで死んでるんですよ。私はまず、連絡を受けると事務所に向かいまして、上司に相談して。木っ端役人どもというのは、まず何を考えるのかと言いますとね。新聞のタイトルが浮かぶんですよ、本当に。自分たちの関わっている人には責任がありますからね。「独居老人、孤独な最後！」「希薄な近所付き合い！」「民生委員は何をしていたのか？」「ヘルパーの訪問なし！」「至らぬ福祉の手」とかね、こういうのが、浮かんでくるんですよ。それで、慌てて手を打って、そういうことにならない様にしておいて、ダァーッと走って行くんです。夏だったら、腐乱していたでしょうから、もっと大変だったと思います。冬だからよかったです。何とか事なきを得ました。それで帰って来るときに、ついでだからキンさんのところへ寄ったんです。「あれー、渡辺さん。何、いつもと違うときに来るね。」って言うから、「ちょっと、上の村で大変な事があって。一人暮らしのおじいさんが死んだんですよ。あれ、4日くらいで見つかったから良かったけど、腐乱死体だの、何だの夏だったりすると、もう、我々の責任は免れなかったですよ。本当に何とか無事、事なきを得たけど。一人暮らしって心配だよね。」とか言って、それでその日は事務所へ帰りました。

その後、忘れた頃にキンさんから電話が入ったんです。キンさんがね、私にね、「渡辺さん、私を施設に入れてくれ。」って言うんです。「施設って、キンさん。キンさんは、自宅で死んでも構わないという、そういうあの契約書まで取り交わして、生きてるんじゃないの？」って聞いたんですけど、「ええっ。とにかく施設に入るで手続きしておくれ。」って言う。「ちょっと待ってて。そこにすぐに行くから。」と言って、キンさんのところへ向かったんですよ。そして、キンさんの話を聞いたんですが、私、ウーッと思いましたね。

キンさんは生活保護を受けているんですよ。受けてるんだけど、たったひとつの楽しみは、朝、喫茶店に行くことなんです。11時ギリギリまでに入ると、モーニングというのが付くんですよ。出てきたコーヒーに角砂糖たった1つ入れて、クルクルクルクルかき回しながら、その臭いを楽しみながら、モーニングを食べて毎日帰って来るのが、たった1つの楽しみなんですよ。で、いつもの

ように出かけて行く。だけど、生活保護の人が毎日モーニングを食べていると、近所の人が嫌な事言うんですよ。「いいご身分だね」なんて。「ウチは夕べの残り食ってんのに、我々の税金でモーニングかい」何て言う奴がおるんですよ。だから本人は、それを知ってるから、喫茶店の人もお得意さんだし、部屋の隅の方にキンさん専用のコーナーが小さく作ってあるんですね。そこへ座って、スプーンでクルクルクルクルやってる横に観葉植物があって、その横のボックスに近所の主婦がモーニングコーヒーを楽しみに来て。近所の主婦というのは、声のボリュームの調整というのが出来ない障害を持っているでしょう、みんな（笑）。それがもう、クリームパフェがどうだの何だの、この前でしゃべっとるんですよ。「聞いた？上の村の話。」「ねえ。」「聞いた聞いた。」「一人暮らしのおじいさんが、死んどったんやろ。」「大変よ。ありゃ囲炉裏だから良かったけど、ガスかなんかで、ガス点けっ放しで吹きこぼれて、ほいで死んで4日経ってて、電気がピッとショートかなんかしたら、バーン！バーン！そんな事になったら、えらい事。」「そんな事言わないでよ。うちの近所にも一人暮らしのおばあちゃん一人おるんだから。」「年寄りって本当に独りよがりよね。自分がそこに一人で暮らしているだけで、どれだけ周りの人に不安を与えているか、心配かけてるか、分からないのよ。自分だけ良きゃいいと思ってんのよ。ブワーンなんて事になったら、もう両隣・・・」「嫌だ、ウチ隣よ。」こう言ってる所の横で、キンさん、こうしてグルグルグルグルしながら、私の事だわ、と思う訳ですよね。それで、へあー、私がここにいては、迷惑がかかる〉と思ったんだそうですよ。私はそこまで考えが至らなかったと。自分の人生さえ、全うすればいいと思っていたようなんですよ。ところが、自分が生きてるという事は、人様に迷惑をかけながら生きている事だから、ここにいてはいけないんだと思って、施設に入る覚悟をしたと言うんですよ。私はそれを聞いてね、そりゃあそうだと思ったんですよ。近所の人たちの話はともかく、キンさんはそれ聞いて自分で決意したんだから。やっぱり、このまま長くここで暮らせば、あと1年、2年、3年・・・の頃には何か起きますよ、80の人ですから。だから自分で決めたんなら、それはいい事だと思ったんです。「本当に、いいだね。本当にいいのね。」って聞いたら、髪は黒々ですよ、歯は真っ白、これがね、歯食いしばってうなずくから手続きしました。

迎えに行く日がきました。小雨が降っているんです。もう、小説ですね。サァーっと小雨が降ってるんです、サーっと、春の小雨。そこへ、私がライトバンで付ける。「キンさん、行くよ」って言ったら、「あのー、これ、持って行ってもいいかね？」って言う。タンスですよ。「そんなもん持って行かんでも、施設には、ちゃんと作り付けの物があるから。」「この行李を持って行ってもいいかね？」行李って分かるでしょう。冷蔵庫のじゃないですよ。和服とか入れるね、こんな編んだようなやつ。「持って行ってもいいかね。」「そんなん持って行かなくても、入院する程度のちょっとしたもんでいいんだから。施設には、みーんなあるんだから。」これもいい、これもいいと言いながら、まあ、わずかなダンボールの荷物になりました。そんな頃には近所の人が傘さして、噂聞きつけてね、立っているんですよ。キンさんの、たった1つの生きがいはね、生活保護受けてるんだけど、土

間に・・・土間ですよ、コンクリートうってないんですから。そこに、小学校の古ーい机をもらってきて、その上に茶碗をね、たくさん盛ってあるんです。これを、商ってるんですよ。とりあえず、商売してる気でおるんですよ（笑）。10円、20円、30円の話ですよ。それをね、近所の人が立っているところへ持って行って、フーッと埃を吹いて、「あんたんとこ、女の子やったね。このへ魔法使いララベルゝ、これあげる。」「ええんかね？お金払わんで、ええんかね。」「お世話になった御礼やで、あげる。」「あんたんとこ、男の子やったね。ガンダム、ガンダム、ガンダム。これ。」フーッ「これあげる。」「ええんかね、お金は、キンさん？」「ええ、御礼やで。」って言って、これを全部無償で配り終えるんです。「ここにおりゃええがね」って近所の人は言うんですけど、言ってる人たちがブーブー言ってたんですよ（笑）。「年寄りは独りよがりね」って言ってた人たちが、「ここにおりゃええがね、キンさん。寂しゅうなるに、私らも。」って言っとるんですよ。そこはキンさん、甘いも、酸いもかみ分けた苦労人です。あの人の記録、私読み直したら、そりゃー、良いとこの娘さんですよ。それが、ある人と恋愛をして。道ならぬ恋ですよ。ずーっと東京まで逃げてきて、男と別れて。そして、それから先、意地があるから国へも帰れずに、何人の男の人がキンさんの体の上を駆け抜けたか（笑）。いいとこの女ですよ。意地ひとつで生きてきた人ですね。そんなキンさんですから知ってるんです。向こう3軒両隣がブーブー「年寄りなんて、独りよがりよね、全く。」って言ってて、あれも真実なんです。それがいざ施設へ行くとなると、「ここにおりゃええがね。」「私ら寂しゅうなる。」「私らおるんやで。」って。これも真実なんですよ。人間ってね、そういう多面体なんですよ。迷惑だなーと思ってみたり、いや、かわいそうだなーと思ってみたりしてるんですよ。それを知ってるキンさんは恨み言のひとつも言わずに、「本当にお世話になりました。」とだけ言ってライトバンに乗り込む。私は運転する。私、ルームミラーを見ると、見えなくなるまで傘さして、近所の人たちが見送ってましたよ。あの、観葉植物の音量調節障害組がね（笑）。キンさんは、もう前を向いたまま、一回も振り向かずに施設に行きました。村を2つ越えて行く養護老人ホームですね。私は、キンさんにとってたった一人の面会客なろうと思いましてね。それから月に一回ずつ施設を訪ねました。訪ねるに連れて、キンさん初めは喜んでいたのが、だんだん喜ばなくなりました。やがて、「どうして私をこんな所に入れた」と言って、私の手をつかんで泣くようになりました。その頃には、髪は真っ白、歯はありません。何故かと言うと、あれはカツラと入れ歯だったんですよ。もう、その自分を装うという張りあいもなくして、「ここには一緒にしゃべれる人がおらん。」って言うんですよ。「私の自由なんか何もない。」って言うんですよ。そりゃそうですよ、朝日新聞読んでる人が、それだけ頭の明晰だった女性がね、ちょっと気が合わない、同じ知的レベルで話せない人たちの中に入って、せめてもと思って球根でも植えると、はじき出されている訳ですから。「私を連れて帰ってくれよ、渡辺さん。連れて帰ってくれよ。」って言われて。残念ながらあの借地はもう傾きかけていた家だから、取り壊して、こんな所に人が住んでいたかと思うくらい狭い狭い更地になっているんです。「キンさん、もう、あの家ないんだよ。」って言うのが辛くて、それから、足が遠退きました。ひと月、ふた月、半年たった頃に、黒枠の葉書が届いたんですね。キンさん、施設で亡くなったんですよ。私、あの事は忘れられません。

地域のために誰が優しかったのかって、キンさんが地域を守るために、自分を犠牲にして施設に入ったんです。近所の人達は、「ここにおりゃええが」と言いながら、ここにおられちゃ困るんですよ。だけど、その人たちも何かがあって、例えば地震があって旦那さんが死んだり、子どもが東京に行ったまんま戻ってこないようになって、一人暮らしになった時に、キンさんと同じ覚悟をしなきゃいけなくなる訳ですよ。だから今、困った人が困らない状況を作れば、自分が困ったときに困らなくて済む社会が出来上がるんですよね。ところが、自分の身に引き寄せて地域を考えるという視点が、なかなか持てんのですよ。もうお金で助け合うしかないんですから。みんな忙しくしてるんですから。だから、「いい社会保障のためには、これぐらいのお金はいい。それが自分に帰ってくるんだ。」というような決意を、一人一人がリアルに想像をめ

ぐらすことが、優しい地域を作っていく事なんだろうと私は思います。生きる仕組みを作っていきたいなあ、と思っております。はい。

駆け足で、もう約1時間、５０分経ってしまいました。遅れてきて、早足で、申し訳ありませんでした。面白かったですか？ありがとうございました。

講　師　略　歴

日本福祉大学中央福祉専門学校専任教員。
ＮＰＯ 東濃成年後見センター理事長。
1950 年岐阜県郡上八幡生まれ。1990 年より 2002 年まで、岐阜県ソーシャルワーカー協会会長を勤める。2001 年より現職。

主な著書
「病巣」「老いの風景」「忙中漢話」「しあわせの汽車ぽっぽ」など多数

助成金事業のご報告

①共同募金配分金　天白ワークスマイクロバス整備事業

トヨタ自動車製　コースター　ふれあいサルーン　２４人乗り（うち車椅子２台）

この度、共同募金からの配分金で、天白ワークス（名東福祉会）のマイクロバスを整備しました事を、ご報告いたします。

事業費総額　５，９６０，１２０円

（共同募金配分金　３，０００，０００円　自己資金　２，９６０，１２０円）

②日本船舶振興会　レジデンス日進車輌整備事業

日産自動車製　キャラバンチェアキャブ　　１０人乗り（うち車椅子２台）

この度、財団法人　日本船舶振興会（日本財団）より、助成金をいただき、レジデンス日進（名東福祉会）の車輌を整備しました事を、ご報告いたします。

事業費総額　３，８０３，２９９円

（日本財団助成金　２，１７０，０００円　自己資金　１，６３３，２９９円）

③共同募金配分金　レジデンス日進車輌整備事業

共同募金会から、２，５００，０００円の配分金が決定しております。

名東福祉会
ニュースサイト
2005

ご寄付ありがとうございました

(敬称略・順不同)
(平成16年12月27日～平成17年3月31日)

相羽　義久
阿部　久
井口 義和
伊藤　健
伊藤　時義
瓜生　廣司
瓜生三枝子
岡部 昭子
葛西　幸子
加藤　康雄
加藤奈々枝
北川　史郎
きまもり会 近藤博恒
倉地　利光
小出悠紀子
小塚 孝明
近藤　圭吾
鈴木 枝美子
鈴木　光夫
高羽　清美
高橋　元彦
高本　重典
田中　義人
天白ﾜｰｸｽ家族会
中埜 須美雄
名古屋手をつなぐ育成会高齢部
日進西学童保育所
野口 三恵子
野寺　艶子
長谷川 捷次
畑村　光枝
はまなす家族会
林　輝夫
日高　勉
平川　諭
藤本　義久
堀　禮二
松岡　千年
松根　博子
松原 日出男
三上 政美
水野　久子
ﾒｲﾄｳ･ﾜｰｸｽ家族会
名東区女性ﾚｸﾘｴｰｼｮﾝﾊﾞﾚｰﾎﾞｰﾙ連絡協議会
名東区手をつなぐ育成会
名東福祉会後援会
森　栄枝
山口　慶子
山田　一夫
山本 明子
吉田　征一

編　集　室

▼１００号記念号は日進フェスタでご講演いただいた渡辺氏の講演録です。「あたたかさ」と「冷たさ」から始まって、「選択」や「主体性」を大切にすることの難しさを具体的な事例から笑いを交えて楽しく伝えていただきました。▼氏は、手法的に完璧といえるソーシャルワークですら、かならずしも本人に幸福や質の高い生活をもたらすわけではないことを指摘されているように思えます。今、福祉の世界で重要視されている人権の尊重という概念も、実は非常にもろいものであることを改めて考えさせられます。▼福祉は誰かに与えてもらうものではなく、地域の人がそれぞれ自分の事として支えあわなければ、どんな制度ができても役にたたないという問題提起です。▼今、私たちの国は財政危機にあって、いずれ、地域住民として現状のサービスを維持するために消費税を上げるか、消費税を上げないでサービスを下げるかの選択をしなければならないことになると思います。私は地域の人々が福祉を自分の事として考えてくださることを願ってやみません。(加藤)

●社会福祉法人　名東福祉会
〒470-0124 愛知県日進市浅田町上納58-4
TEL 052(805)1003 FAX 052(805)1004
●メイトウ・ワークス
〒465-0055　名古屋市名東区勢子坊2-1303
TEL 052(702)2863 FAX 052(701)2079
●天白ワークス
〒468-0023 名古屋市天白区御前場町327
TEL 052(804)5487 FAX 052(804)5416
●デイケア　はまなす
〒465-0054 名古屋市名東区高針台1-911
TEL 052(704)7551 FAX 052(704)7552
●レジデンス日進・ハートフルアクト日進
〒470-0124 愛知県日進市上納58-4
TEL 052(805)1003 FAX 052(805)1004
●こいけホーム
〒465-0047 名古屋市名東区小池町468-1
TEL 052(777)8385 FAX 052(777)8385
●天白ホーム
〒468-0021 名古屋市天白区平針字大根ヶ越141-3
TEL 052(807)1578 FAX 052(807)1578
●製パンサイト「パネテリア・ロト」
〒470-0120　日進市浅田町平子4-400平子台マンション１F
TEL/FAX (052) 808-6555
●農耕・木工サイト
〒470-0124 愛知県日進市浅田町上の山
TEL 080-3616-5610